

## 《書評》

## 出口あり

——永野潤『サルトル』<sup>1</sup>を読んで——

石 川 求

大学に入りたてのころ、ドキュメンタリー映画『サルトル——自身を語る』（1976年制作）を観た。だが、目まぐるしい画面展開と濃密な内容に、無学な私はとてもついていけなかったというのが本音である。だからというわけではないが、いま記憶に残っているのは、『嘔吐』からの朗読がかぶさるマロニエの樹の異様な黒さと大きさ以外には、ただ一つの場面しかない。それは、自身の「醜さ」について語るサルトルの、何ともさっぱりした姿である。あらためてシナリオを読んでみると、この箇所は幕開け早々にあった。幼少のあるとき、おのれの醜さが他者によって言葉にされたことを「事件」と呼びながらも、彼は飄々と話している。

自分の醜さを嘆いたことは一度もない。仕方ないじゃないかと考えてた。……たしかにその後おおくの人たちからだいたい善意でそのことを繰り返し指摘されたけれど、それで別に傷ついたことはないな<sup>2</sup>。

ここには恥じらいのようなものさえ微塵もなく、漂っていたのはむしろ明け透けの開放感である。まだ若く、下らない秘密をたくさん抱えていた

---

1 ナツメ社、2003年。以下、本書からの引用についてはページ数のみ本文中に「」で示す。なお強調は原著者に、「」の補足は引用者による。

2 海老沢武 訳、人文書院、1980年、17-18頁。

つमりの私は、そこでサルトルの対話者にも共有されている、お互い“イチジクの葉”まで取っ払おうといったエキゾな気配にいきなり度肝を抜かれた。

サルトルの自認する「醜さ」はおそらく多くの場合、彼の斜視によるものだったろう。本書の右ページに活躍するイラストの(愛らしき)サルトルでも、その特徴はよくとらえられている。片方の眼はこちらを見据えていても、もう一つの眼は別の方角を見ている(ように見える)。サルトルと面談する者は、この視線のあべこべに戸惑いつつ、しかし大いに刺激されもしたにちがいない。著者は、サルトルの思想が、自我の内面への沈潜を打破して「外へ向かう哲学」[30]であることを明快に説く。まさに図像となって描かれた視点の交差は、サルトルの外へとあえて横溢して止まない思考と行動を象徴しているかのようだ。

なぜ外なのか。本書はこの問いかけにおいて一貫する。これに答えようとする試みこそが、哲学における理論と実践との一致という(今や忘却されようとしている)秘密をも解き明かすからである。しかしサルトルの生涯がそうであったように、彼の理路も単調ではない。これら両者にたいする必要かつ十分な目配りという点で本書はとりわけ傑出している。

サルトルは意識を哲学の基点に設定するという“古典的”手法を生涯くずそうとはしなかった。しかし、外部への志向を意識によって語りだそうとするかぎり、それは重大な難題をも抱え込むことになる。意識が関係する対象をいくら「外」とみなそうとも、その対象はやはり意識の経験に内属し、内在するではないか、という疑念である。サルトルがこのアポリアを乗り越えて、意識はあくまで外へ関係すると言い切るためには、ただし『存在と無』(第3部)の他者論まで待たなければならない。

自己の意識という関係「する」主体は、じつは他者の意識によって関係「される」客体でもある。主客の転換というこの「危機」[100]が、「外へ」というサルトル年来の主張の真理をいわば照らし返すことになった。～するか／されるかという自／他の関係は「相克」[102]である。他者が有する意識体験という大層な領域にすっぽり収まるような「モノ」が自己ではない。自己はおのれの尊厳を賭けて、たとえわずかでもその外部へと脱出しようともがくだろう。他者とてまったく同じなのだ。こうした自他による

抵抗が、意識の「外部」の永遠性を強く証言しつづける。サルトルの意識哲学が同時に、「お互いをモノにしようと争う」[206] 自他の共存可能性を問う社会哲学さらには政治哲学でなければならないのもこのゆえであり、また彼の哲学が意識を起点にしながら唯物論に接近する必然性もこの点と関係している。

主体は、たとえ自己のモノ化にどれほどあらがおうとも、この世界に複数の他者＝主体がいるかぎり、みずからの客体＝モノ性をぬぐい去ることはできない。主体性をなにか特別で絶対的なものと考えることが奇妙なのは、ちょうど自己の容姿の美醜を決める最終基準は自分自身が握っていると思ひ込むことが滑稽であるのと似ている。私たちは好むと好まざるとにかかわらず、他者という外部からの（勝手いや自由な）“判定”の眼にさらされつづけている。人間は対他存在であるというこの真実にいたって恬淡たるあのサルトルが、“主体主義者”であろうはずはない。

著者によれば、個の意識というそれまでのサルトルの主たる関心を脱却する転機は、1940年から翌年にかけての捕虜収容所体験が与えた[72-73]。注目すべきは、ここで彼が他者との共同生活の何たるかを（意外にも楽しみながら）知ったことだけではない。より重大な一歩が、そこで自作の戯曲を自身も役者の一人となって演じる経験によって踏み出された。哲学者と演劇人との理想的な合一という歴史上めったにない実例「J.-P.サルトル」は、まさにここで産声をあげたのである。

例えばプラトンの対話篇は、舞台上で演じられることを念頭にして書かれたものではまったくなく、徹頭徹尾、読むことあるいは（誰かが朗読するのを）聴くことにのみ捧げられた言葉のやりとりである。当然だが、これにたいし戯曲はただそれを読む場合にも、観客として見る可能性、あるいは役者として演じて見せる可能性をあわせて意識するよう求められる。サルトルなら言うだろう。同じ対話であっても、プラトンの創作とその理解には不要だが、詩人たちの劇作およびその上演や鑑賞には必須だった或るものとは何か。それは観客の、そして登場人物どうしの「視線」に対する配慮である。サルトルはこの演劇体験をつうじ、自己のごく自然な行為も舞台の上での所作として「見られる」ことをいよいよ強く自覚したのではないか。他者の眼は、自我が無為の“聖域”に閉じこもることを許してくれ

ない。他者と共につくりあげる世界という劇場においては、たとえ意図せぬ無作為でさえも、一つの行動として空間の中に歴然と位置づけられる定めにある。

こう書くと、じきにサルトルが創出するあの登場人物ならずとも「地獄とは他人のことだ！」[116]と思わず叫んでしまいたくなるが、しかし、よく知られたこの戯曲のタイトル「出口なし」とははっきり異なって、サルトルの哲学には外への通路がちゃんと用意されている。彼はもちろん他者を深く畏れつつも、自他が形成する「群衆」に絶望することはなかった。天性の明るさでも言ったらよいのか、(私を筆頭に)深刻ぶって悲観するしかまるで能のない「くそまじめの」[95]おじさんたちとはそこが違うのだ。自伝的著作『言葉』の中で、サルトルは幼年時代の「映画館」体験を生き生きと回顧している……。老若男女は儀礼のためにこの暗い場所に雑然と集まるわけではない。だから、

礼儀作法が消えると、人々をほんとうに結びつけている絆、粘着が明らかになった。私は、四角張った儀式がいやになり、群衆がとても好きになった。私は、あらゆる種類の群衆を見たが、この露わな人間の結びつき、すべての人の前にめいめいが厳として現存すること、この目覚めた夢、人間であるというこの漠然とした危機意識に再び出会ったのは、1940年、第12D捕虜収容所のなかにおいてだった<sup>3</sup>。

映画館と収容所。この似ても似つかない人間の居場所を、サルトルの脳裏において結びつけている想念とは何だろう。それは、観客であること、ではなかろうか。たしかに、収容所において彼は観客どころか、作者であり役者でもあった。けれども、劇作家や俳優はまず第一にみずからも観客であることを要請される。役者サルトルはそのとき、「見られる」観客になったのである。逆に、劇場や映画館にただの観客はいない。最初から最後まで客が傍観者のまま放置されるような作品はあきらかに失敗作である。今さら私が述べるまでもないが、いわゆる異化効果なるものも、客が劇空間

3 白井浩司・永井旦 訳、人文書院、1975年、84頁上段。

に漫然とではなく意識的に同化し参画することをこそ狙った巧妙な「ずらし」であり、また無意味に徹した芝居があったとして、これもあえて劇のドラマ性を放棄することでむしろ観客自身の秘められた劇作意欲を刺激しようとする究極の「くすぐり」であろう。観客はじつは自身も見えない実践者となることで舞台や銀幕にともに参加している。まだ小さなサルトルが満員の映画館に、バラバラの「集列」[212 et passim]ではなく、まさに人間どうしが「目覚めた夢」を見ようと或る「絆」で結合している「(溶融)集団」[214]を感じ取っていた(と思われる)のはこのためである。以下は、『弁証法的理性批判』のサルトルによって注目される革命的集団を、著者が説明するさいの印象的な文章である。

彼らは外側の第三者によって関係させられるのではなく、お互い自ら第三者となって関係し合うのである。各「私」は、他者のうちに「私」を見る。〔例えば〕「私」はバスチーユへ向かう隊列の後方にいるが、先頭に立って「バスチーユへ！」と叫んでいる人間も「私」である。ここでは真の人間関係が回復されるのである。 [214]

もとよりここで「第三者」とは、映画館では観客のことである。繰り返すが、この世界に純然たる「外側の」観客はいない。しかし、みな等しく観客で(も)あることが共通の世界の中に参加するための必要条件となる。観察しかつ実践する者として世界という場を共有しているかぎり、各自の内と外とはつながっている。他者の苦悩は私自身の苦悩であり、ひとりの抵抗はすべての人間の抵抗と「関係し合う」。だからここに前衛と後衛の区別はない。とはいえ、これによって個は不可視の全体に埋没するわけでもない。他者の視線にさらされることの真意は、集団のひとりひとりが固有の名をもつ個性として注目される、ということにはほかならないからである。

ふたたびあの『言葉』からの或る一節を引いて拙文を終える無芸を許されたい。たぶんサルトルの映画を観た後あたりで私はそれを読んだのだろう。気恥ずかしいけれど、このくだりをペンで囲っている。でも、サルトルの主張するアンガージュマンの基本前提とはやっぱりこういうことではないのかと、今なお思わずにはいられない。お前はぜんぜん……、との絶

句したお叱りの声が大向こうからあがったような気もするが、ちかごろ耳が遠くなって聞きもらしたことにする。

自己満足にふけていれば、他のうぬぼれ屋たちからは愛されるだろう。隣人を中傷すれば、他の隣人たちは面白がって笑うだろう。しかし、おのれの魂を叩くならば、すべての魂が泣き叫ぶだろう<sup>4</sup>。

他者へ、社会へ、世界へ、すなわち外への関心に一個の自己として悩みつづける若者（ということは結局、すべての魂）に本書を勧めよう。だれより著者じしんが、若き彼ら、彼女たちに読まれることを熱く望んでいるにちがいない。

(2005 年の成人の日に)

---

4 同上、113 頁下段。なお引用者の都合で訳語を少しだけ変更した。